
作った、世界は

菜風 龍鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作った、世界は

【Nコード】

N6044Y

【作者名】

菜風 龍鬼

【あらすじ】

『ナマエヲクダサイ』

そして手に入れた名前は” - - - - - ”

僕はその名前を使って、”自身のセカイ”で暮らす。

だけど、友達になった人たちはいつも一緒にいてくれない、

だから僕は、友達達を”
-
-
-
-
-
-
-
”した
た

はじまり

さあ、いらっしやい、ボクの世界へ。

痛みも悲しみも苦しみも無い”ボク”の世界へ・・・

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

-

”目が覚めたら”周りは何も無かった。

目が覚めた？

1人の人間は何も無いトコロにたっていた。

「ココは・・・？」

1人の人間は何も無い白い空間を見渡す。

「誰かいませんか。」

ちよつと呼びかけてみる。

だが返答はない。

「ん？」

”返事は”無かったけど、何も無いと思われてた空間に何かが落ちていた。

1人の人間はそれを拾う。

それは本のようにだった。表紙には名前を記入する場所があり

中には何もかかれてない白紙の紙があった。

そして最後にペンが挟まってた、1枚の紙と一緒に。

そこにはこう書かれていた。

『君の名前を書けば、君だけのストーリーが始まる』

1人の人間はペンの蓋を開けて表紙をみた。

「ここか・・・」

そして名前を書こうとして1つの疑問を覚える。

「・・・ナマエ？ そうだ、”ボク”のナマエは？」

1人の人間は、頭を抱えて悩んだ。

- - - - -

- - - - -

- - -

本とペンと1枚の紙しかない空間に滞在して何時間たったであろうか

いや

何年、何百年たったある日。

「そうだ」

1人の人間はペンを持ち、本にこう書いた。

『ナマエヲクダサイ』

「話」はじめまして 僕の名前は”.....”」

本がパラパラと開かれ、”世界”の構成が始まる。

「始まりの都市 ｝トイ・マラン｝」

白い空間に景色が作り出され、建物が作り出される。

そして1人の人間の空からは1枚の紙が落ちてきた。

■ステータス

【名前】菜風 龍鬼

【タイプ】旅人

【LV】 1 1 0

【STAB】 2

【HACK】 1 1 4

【INT】 1

【DEF】 1 0 3

【MR】 2

DEX	AGI	H P	M P	S P
61	64	6291	688	6084

「・・・・・・チートすぎるだろ」

- ・ 龍鬼はむかつて紙を半分に破くとちよつど数値のところが破け・・・

ステータス	
【名前】菜風 龍鬼	
【タイプ】旅人	
【LV】	11
【STAB】	2
【HACK】	45
【INT】	1
【DEF】	103
【MR】	2

DEX	AGI	HP	MP	SP
61	64	621	688	608

「お、これなら使えそうだ。 、そして僕の名前は龍鬼か・・・」

自身を認めるとその紙は解け、 ” 龍鬼 ” に絡まる

普通な旅人の服装の上に青いマント

「さあ、物語の始まりだよ」

そつえば、世界が光りだし ” モンスター ” が生成される。

- - - - -

- - - - -

- - - - -

- - -

暖かい明かりが降り注ぐ

そう、ここは始まりの町トイ・マラン

龍鬼が2番目に好きな町。

中央にあるきれいな泉付近には初心者が初めてINするとそこへたどりつく。

泉をじっと見てみると、また初心者が来るのか、キャラクターが転送されてくる。

ただし、泉の上。

龍鬼は立ち上がり、ほんの気まぐれで泉に落下を助けてやろうと足に”力”をためる。

「おしっ」

ちよつと助走をつけて泉に向かって走り、飛ぶ。

がしつといい手ごたえと、水しぶき。

「ほら、君大丈夫かい？」

龍鬼が片手に持っていた・・・

「小銭袋・・・？」

「・・・ド・・・」

後ろから声がする

「ド？」

後ろを向くと泉に落っこちた、初心者が俺をみてアワアワと震えている

「泥棒ー！」

「フギヤッ」

龍鬼は初心者に水をかけられまくりびしょびしょ

「ちよつ、金は返すから水はやめてっ水はっ」

龍鬼がそう叫べば水しぶきはとまる。

「あーっ、びしょびしょじゃねーか」

龍鬼が半分苛立ちながら言つと泉から出てきた初心者が言う

「お前が悪いんだから、いきなり小銭は盗むし、少ししか入ってないんだから返せっ」

「だから盗んでねーって」

龍鬼は手をだしてあがるのを手伝おう・・・と

「っけっ ドロボーが」

手をはたかれた。

「・・・チツ、ドロボーじゃねえよ、 菜風 龍鬼だ。新人。」

そういつて龍鬼はもう一回手を出す

「新人ちがう、真下だよ」

その手をとつた真下。

「んじゃ、お詫びもかねて、フレンド登録でもー」

龍鬼はスキルを使おうと指を鳴らす。

「だがことわつぶはっ」

真下、しゃべっていたら、下から熱風が。

「あーしゃべると囁むぞ」

そついう龍鬼も手から熱風を出していた。

「・・・なんか凄い人に捕まった予感」

真下がそうボソツというと龍鬼は風を止めて言った

「・・・今頃気がついた？」

そついつて龍鬼は笑いかけた。

(・・・あー・・・このゲーム買っくんじゃなかった)

「そだ、真下っ」

龍鬼が思い出したと手をたたきつつ言った

「狩いかない？」

「しょうがないな」

真下はそついうとエリアへと走っていった。

「あー、はえー・・・w」

龍鬼も遅れながらついていくと・・・！

2話「初めての友達」

別れ、そして見つけた“データの山”

「うっわ、スライムの大量発生イベント中だっけ」

龍鬼は青い塊を持ちながら言った。

「わー、何この子かわいい」

真下はスライムの中から大量発生のバグらしい黒いペンギン（死んだ眼をしている）子を発見した。

「・・・ペットにするかい？」

「・・・っ！」

真下の反応を見て教えてやった。

「その子さ、この付近のレアモンスターだよ、名前はないけどその子に主登録すればほかの子に取られないし殺されることはない」

龍鬼がペットの話をしていると真下と黒い塊はなにかぶつぶついていた

「スイカペンギン」

「ペー！」

「・・・はー、登録しちゃったか」

龍鬼はため息をしながら真下の頭をぽんぽんたたく。

「は？」

「ああ、ペットに名前をつけることが”主登録”だよ」

「簡潔でよろしい」

「ペー！」

「あれ、何か立場変わってない？、なんかスイカペンギンとの相性よくなっ？　なんかスイカペンギン刀もって俺の方に歩いてくるしっ！？」

龍鬼はスライム達の隙間を走っていく。

「行けっ、スイカペンギン」

「っペー！」

スライムを気にしないで走り抜けるスイカペンギンは刀を抜き、龍鬼をおいかける

「あ」

「ぺっ？」

真下がそういうとスイカペンギンは動きを止めた、龍鬼も同時に止める

「ん？、どうした」

「いや、そろそろ寝ないと」

真下はそういうと”バイバイ” と言って消えた

「・・・・・・・・・・帰ったか」

龍鬼はスライムをつかんだ。

「近くの町でも行くか・・・」

龍鬼はさっきよりも暗い表情で歩いていくと看板がみえた

「カルデア・・・行ってみるか」

ちよつと歩くと目の前には”クスデータ”の塊と“バグデータ”の塊があった。

「・・・・・・・・君」

龍鬼の足元には淡い青色の明かりがある

「NPCになり損ねた子が・・・」

龍鬼はデータを改変して”町を作り上げる”

そしてある小屋に淡い青い明かりとともに入り、バグデータと合わせて”人格”と”名前”を持たせた。

そして”生まれた”子は俺を見て言った

「僕は・・・？」

「君は・・・そうだね、僕の弟」

龍鬼は床に座ってる人に語りかける

「君の名前は菜風 龍鬼」

「りゅーと・・・？」

「そうだよ、君はこの町、カルデアに住んでるの、この小屋は菜風の家。」

「僕らの家？」

「そうだよ？いつもここに帰ってくるの」

「そんなんだ・・・」

龍鬼は立ち上がり小屋を見渡す。

「龍鬼、君の記憶は・・・」

「ん？、ちゃんとあるよ 龍鬼が助けてくれた事、運営会社に・・・」

捨てられたことも」

「・・・ごめん」

龍鬼はしたを向きつつ謝った

2話「初めての友達」 別れ、そして見つけた“データの山”（後書き）

次回、龍兎（NPC）として作られた時でも短編としてかこうかな
とおもっています

短編「ボクの生まれたキツカケ」

「新しい町……そうだね、村……いや町がいいかも」

1人の男がp c片手にコーヒーを飲んでいる。

「そうだ、町といえばNPC」

男がカタカタとキーボードを打っていると誰かが部屋に入ってきたようだ。

「よっ、葵」

「誰かと思えば……社長……」

「はい、シャチョーさんですよー」

「あ、社長、例の町のNPCこんなのはどうでしょうか」

葵はカタンッとエンターを押す。

そうすれば画面には男のキャラクターが映る。

「……外見はいいね」

社長がそういったかと思えば、画面に「エラーの文字」

「なっ!？」

葵がイスに座り直し、エラーを解除していく

「消えろ、消えてくれ」

はじめはエラーを消す速度が早かったが・・・

「なっ」

次の瞬間、画面いっぱいのエラーの文字。

「・・・葵」

社長がそついえば葵は動きを止めて少し考え、手はパソコンのコンセントを持っていた。

「・・・ごめん」

次の瞬間パソコンの画面が真っ暗になった。

「次はバグなんて作らないようにたのむよ」

社長はそついうとあきれた顔をして去っていく

「・・・ハイ」

葵はイスに座りなおし頭を抱えた。

「くっそ・・・っ」

もう一回パソコンをつけると町のデータとNPCのデータを消した。

短編「ボクの生まれたキツカケ」（後書き）

龍兎はこうして作られていた・・・が葵の手によって消され、あのエリアへと流れ着いた。

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」(前書き)

短編の続き、龍鬼サイド

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」

このごろ、夜あ的小屋へとあしを運ぶと必ず魔されてる龍鬼をみる

「これも、アイツのせいだ・・・」

龍鬼は装備をすべて小屋に置き体のデータを崩し、どこかへと消える。

(・・・アイツ、製作者に復讐してやる・・・)

・・・

・・・

・・・

一方葵はあの会社をやめ、自宅でパソコンをいじって、自分が勤めていたオンラインゲームを見ている。

「・・・はあ・・・」

そんな姿をパソコンの“内側”から見ていた龍鬼。

「・・・お前も居場所をなくしたか・・・」

龍鬼は葵の姿を見ると“昔の自分を思い出した”

ずっと画面に文字を出す。

オマエ ハ コノ セカイ ヲ

ステラレルカ？

YES / NO

迷いつつカーソルが動き出す。

それはイエスをさして・・・

「そっか・・・なら助けてあげるよ」

龍鬼の目には怒りの色は消え去っていた。

龍鬼は手を出すと淡い光が画面から流れてきて・・・形を作る

「やあ、葵」

姿をすべて作り出されると龍鬼は話しかける

「・・・・・・・・それは、俺のことでしょうか？」

目をパチパチさせた葵は周りを見渡して一言

「君は葵、ボクの町の一員さ」

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」(後書き)

カルデアの町の一員となった葵・・・次回は葵、カルデアに降り立つかな

3話「おかえり　そして始めましてと久しぶり」

アレから数日間姿をくらましていた龍鬼。

ある日カルデアの町へと帰ってきたとき、ある人物と一緒にいた。

「…………誰？」

「ああ、龍鬼、この人は真下、俺のことドロボーとかいったんだぜ？」

「どッ、ドロボーしたのはマジじゃないですかっ」

そういつて息を切らしている真下。

「さすがにきつかったかなーカルデアまでくるの。」

龍鬼はキッチンから紅茶をもってきた。

「それらなボク読んでくれればワープしたのに…………っ」

それを見た龍鬼は戸棚から茶菓子を取り出した

「それじゃ、レベルが一向に上がらん」

「そりゃそうだ」

「…………私をほっておいて話をすすめないでくださいます？」

「あ、ごめん」

龍鬼はそういうともう1つイスをどっかから取り出す。

「んで、ねーさん、用が2つあるから来いっていったけど・・・？」

「ああ、新人を連れてきたんだ、龍鬼と仲良くここで暮らしてもらおうと」

龍鬼はそっぴいながら手をたたくと誰かがワープしてくる。

「・・・・・・・・えと・・・」

「・・・・・・・・見た目、メガネマフラーオタクって言った所かしら」

「真下、葵がびびるからいきなり言うなって」

案の定、葵は固まっていた。

「ねーさん・・・・・・・・こいつ俺の・・・」

龍鬼は何かに気がついたようで、こっちを見てくる

「コノ人はね、居場所を求めてこのセカイにきたのさ、今は過去を持っていないからみんな親切にたのむね」

「・・・・・・・・わかった」

「了解、私は真下っていうんだよろしくね葵君。」

龍鬼はなにかつつかかるようだったけど納得したようだ。

「それじゃ、ティータイムとしますかっ」

龍鬼がそついえば甘い香りをした紅茶3つとコーヒー1つをもってきた

「「「はい」「」」」

四話「ダンジョン攻略 葵 怪我」(前書き)

グロイ表現はある恐れありなので注意。

四話「ダンジョン攻略 葵 怪我」

ここはカルデアの菜風の家

最近葵も住み始めて騒がしいけど楽しい日が過ぎていく。

「ねえ、龍鬼」

どこからかはがしてきた張り紙を取り出して何かしている葵と

「んー？」

紅茶を飲みながらそのチラシを見ている龍鬼

「新 ダンジョン？ ラスボスがドラゴン・・・ レアドロか
あ・・・、逝きたいの？」

「龍鬼、漢字変換違うから逝きたくないから」

「だってみんなで行ったら確実に逝くよ？」

龍鬼は紅茶を飲み始める

「んー、皆でいけばどうにかならないかなー」

真下が奥から顔をだして答える

「・・・しょうがないかー」

それから数分で支度を終わらした龍鬼たち

「さて、ダンジョン向かうかー！」

「「おー！」」

「．．．．．」

「．．．．龍鬼？」

「何？」

「いや、何でも」

．．．．．

．．．．．

．．．

．

そして、ダンジョン前。

「ここか」

近くにいた鳥を攻撃する龍鬼

「なんか凄そうだ・・・」

言いだした葵はダンジョンのでかさにびっくりしているようだ

「・・・レアドロ」

目が小銭な真下

「・・・」

やはり無言の龍鬼

「・・・さあー！行こうか」

心の中では何か起きそうな予感を感じていた。

それが当たるなんてこのときは思いもなかったけど。

そして龍鬼たちはダンジョンに足を踏み入れた。

「以外によわっちなー・・・」

中のモンスターを着々と倒すとラスボスがいる

「つまそれは普通か・・・」

龍鬼は下へと着々に進んでいると次のエリアでは真下が戦っていた

「エイッ」

そして武器を振り下ろす真下。

敵の上にはダメージが出ている

「・・・・・・・・・・1」

龍鬼、笑いをこらえるのに必死。

そんな時であった。

壁に寄りかかっていた葵の地点・・・

それに龍鬼はちょっとだけ心の中で引っかかっていた

壁のヒビに気がついた龍鬼の叫び声でその引っかかりは取れたわけ

だが・・・

「ばっか葵っ そこはドラゴンの出没箇所っ」

びつくりした葵を後ろへ投げ、壁を見つめ固まってる龍鬼。

それと引き換えに、壁は何も言わずに崩れ去る。

ドラゴンの片手が飛び出した時、龍鬼は龍鬼の前に立つ。

「せめてさ、戦うとかしてみようよ」

どこかでドロップした剣を構え、ドラゴンの爪をとめる。

「・・・っ、何処までいけるかな」

龍鬼は剣を片手に持ち替えスキルを発動させようとすると片側からドラゴンの手が来るのがわかった

「ねーさっ」

「龍鬼っ」

「きゅうりっ」

三人の声ができるなーと龍鬼は思っていれば次の瞬間には空を飛んでいた。

「負けた・・・のか」

真下は飛ばされた龍鬼の体をみた。

「回復しないっ」

龍鬼の体は、腹の部分をドラゴンの爪で挟まれ、結構ヤバかったりしている。

「うあー・・・変な感覚」

もう少しドラゴンに近ければ、胴体飛んだぞっ

遠くで真下がそういつてるような気がした。

ああ、移動魔法かけられた。

そう龍鬼が思っていると思惑はだんだん失われて行った。

菜風一家の小屋に着いた時には龍鬼の意識はなくなっていた

「傷は、無理やり塞いだから大丈夫だとは思っけど、データの欠損が大きいかな・・・」

真下はつれてくる際にドラゴンの爪を防いだ時に壊れた武器を見ている

「さすがに武器を一瞬で武器壊す威力を1度は受け止めた龍鬼は凄

い・・・ところで後ろの男共は何もしないできゅうりに助けられたと・・・」

2人とも、違う方向をみているがチラチラと龍鬼をみる所、気になつているのは一緒みたいだ

「・・・2人が喧嘩してなかったら、こんなことにはならなかったと」

真下がちよつと怒り気味

「・・・だつて」

「だつてもクソもあるかつて」

「・・・ごめんなさい・・・」

「葵も葵でっ」

「ッハイッ」

こうして小一時間ほど真下に怒られた2人

さすがに無理やりでも仲良くしている2人。

「これで、龍鬼が気になってたこと、1つは消えるかな」

短編「ユメ」

「体が軽い……」

真っ白い空間の中そう思っていると空間に龍鬼の音がする。

「……………今日もいつも道理か」

「どっか誰も知らない町行きたい」

「オンラインゲームとかのセカイに入りたいな」

確かに龍鬼の声だったが龍鬼本人はこんな記憶が持っていない……いや

知らなかった。

白い霧が晴れるとそこには……………

普通のアパートで暮らしている龍鬼がいた。

「……………あ」

そうして、龍鬼の消えた記憶を再現するみたく、その空間で物語はすすむ……………

「……………違う、これは違う」

そう思えばこの空間は崩れさり、龍兎が俺を呼ぶ声が・・・

（キミハ、マタニゲル）

「・・・ばれたか」

「・・・ねーさん、どういふことなのか説明ヨロシク」

龍鬼がぼーっと自分の腹を見ていると両端に葵と龍鬼

「・・・おねがいしますよ?」

「はあー・・・俺も今さっき思い出したんだけどね」

そういつて腹を触りつつ遠くをみた。

「俺は元はリアル・・・地球でうまれた極一般の学生さ、普通に1人ぐらしをしていた。」

クッションでモフモフしていると腹の傷がふさがってないのか“赤”が移った

「あ、やべ」

龍鬼はクッションを置いて腹に片手を当てて、“治癒”を始めた

「俺はその世界が嫌になり、自殺を図る。そして気がついたら、『1人の人間』としてコノ空間ができる前・・・に生きてた」

「・・・じゃあ龍鬼は?」

「この世界を作り出した人だね。まさに俺がそう」

「・・・だから、バグデータと成りかけてた僕を・・・」

龍鬼は自身の手をみてた

それをそつと取る龍鬼

「でもキミの人格はキミのもの、姿が無かったからキミに“姿と名前”をあげただけ 葵、キミは特別」

くるつと後ろを見れば固まっている葵がいた

「キミは・・・もう知ってるかも知れないけど”龍鬼”の製作者の神風 葵」

「かん・・・なぎ？」

「そう、俺は現世を嫌になった葵を自由があるこの世界につれてきた。」

沿うしゃべっていると龍鬼の体に異変が出る

龍鬼の身の回りからデータを崩し、体に取り込んでいた。

「俺はね、データを操ることができるんだ、だから、何にもできる・・・けど1つだけできない・・・こと」

そのまま下を向いた龍鬼

「ここはリアルでは『オンラインゲーム』として使われてるんだ。俺に許可とらないでさ。」

そっちも多少は割り込むことはできるけど・・・リアルの人が来放題なんだよね・・・」

そんな時・・・窓から黒い光が来て・・・データと混ざり龍鬼の体へ
と取り込まれた。

「ちなみに真下は普通にリアルの人、だからさ・・・」

そういつて笑いかける龍鬼。

そして笑いかけてくれた龍鬼と葵

龍鬼が龍鬼の頭をなでてた

「なっ 俺の方が上なんだぞーっ」

「いやあー・・・ね」

そんな時、龍鬼の剣が目の前にいきなり現れた

『えっ!?!?』

次の瞬間その剣は数を増し龍鬼を中心にして大量に発生した。

「ねーさん!?!?」

数を増した剣と風に飛ばされた龍鬼と葵

「何っ!」

「なんなの・・・制御が・・・」

龍鬼は中心でしゃがみ込んでいた

剣が増えていくにつれ、突風も吹き出した

「ねーさっ」

家具が飛んでいく中龍鬼は龍鬼の元へと行こうと剣の中を突き進む

「駄目だっ、りゅー・・・とっ 力抑えられないっ」

龍鬼はそう叫ぶが突き進む龍鬼をとめられない

「くっそっ」

龍鬼は傷ついていく龍鬼を見たくない

だから・・・ 飛び交う剣を使い外に出た。

「ねーさんっ!!」

「ちよっ!?!」

龍鬼と葵の声を後ろで聞きつつ、晴天の青空に飛び去る

(さよなら・・・かなあ・・・ 真下には何もいえなかったな)

第六話「サヨナラ 菜風家の改装」(前書き)

前話で龍鬼が脱走をしたためここから視点が2つになります

第六話「りゅーと あおい ましたのはなし」

第六、五話「りゅーきの話」ってススンデキマス

第六話「サヨナラ 菜風家の改装」

「ねーさん・・・？」

龍鬼が青空に消え去った次の日、龍鬼は1人足りない部屋にいた。

その体は乾いた血で汚れていた。

龍鬼が去った後、葵と1つのことについてしゃべっていた。

龍鬼が治療中に、“外から来た黒い光”

アレは確かにバグ。

「バグを取り込んだなんて、ねーさんは・・・」

龍鬼はリビングへ向かうとそこには葵がいた

「おはよ」

「おはよーございます」

言葉が無い朝食が始まる。

カチャカチャと食器がぶつかる音・・・

そんな時、仮想モニターが開き、真下がINしたことを知らせた。

「・・・言わないといけないよね」

「・・・僕らがNPCの類だって事もね・・・」

「その前に・・・」

龍兎は玄関があつた場所を指差す

「・・・小屋を改築しないとな・・・」

その言葉と同時に元気な真下の声が

「なっ玄関が木っ端微塵っ!?!」

「お、真下いらっしゃーい」

「イラッシャイマセー」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

で、なんで龍鬼が?

- - - - -
- - - - -
- - - - -

あー、力暴走させてさ・・・

- - - - -
- - - - -
- - - - -

（龍鬼消えた理由説明中）

- - - - -

うそ・・・だ・・・ろ！

- - - - -

いやいや、マジだから

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「龍鬼が・・・」

真下は青空を見上げた

「・・・きゅりのばっかやろおおおおおお」

「・・・叫びたいのはわかるが、カルデアの皆さんびびるからヤメテ！」

龍鬼が涙目でとめにかかる。

「んでもどうしようか、この小屋」

「って、変わりすぎです真下先輩」

葵、ひっして突っ込んでみる

「それにしても、ねーさんいたらデータ組み替えてくれそうだけだなー・・・」

龍鬼はそういつていると葵がふつと言った

「バックデータ」

「あるかもっ！」

「あのきゅりならやりかねない・・・」

そういつて龍鬼がつかっている本棚やベットのあさっているとなんかクッキーが1枚と紙があった。

「バックデータです。 投げてねっ」

葵はその紙にかいてあったことを読み上げた。

「ついで『キラッ』しないか」

「だが、丁重にお断りする」

葵と龍鬼がコントやっているといつのまにかクッキーと紙を盗んだ真下。

「粉にして、水で固めてから投げるってね・・・」

ネリネリネリネリネリ・・・

そうして外にでて練った塊を投げる

そうして爆発音と同時に新築、3階建ての家がでてきた。

そして・・・

「「ななななななななななななあああああああなにこのビルはああああああ」」

第六、五話「名の無き山」

無数の剣と剣をジャンプしながらわたる龍鬼

「・・・この疲労感どうにかならないかなー」

龍鬼はあれから行く宛ても無く一定の方向へ進んでいた

常時スキル発動状況の龍鬼にとってはそろそろ限界でもあった

「あー・・・あの山パワーを吸い取ってくれる体質・・・」

フラフラしながらその山へと足をつけると自身の力を山が吸い取ってくれる

「はぁ・・・」

一息ついたとたん“立つ力も持ってかれた”

地べたに大の字でぶつたおれると眠気が誘う

（さぁ、おやすみなさい）

（かきとちゅうです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044y/>

作った、世界は

2011年11月21日09時38分発行